

本書はこのたび、内容を一新しました。目指したのは、デジタル・ネイティブに刺さる教科書です。イラスト・図版を大幅に増やし、看護師国家試験問題も意識しながら、各章の冒頭には「これだけ見れば」重要事項が押さえられるという内容を、解剖と機能面からまとめています。ストリーミング音楽配信を利用するZ世代は、冒頭の数秒で聴き続けるかを決めるため、最初からサビをもってくるという最近の楽曲の手法をとりました。また、本文は電子メールよりもLINE[®]を用いる学生にも読みやすい簡潔な文章にしました。SNSを用いて学習したり、授業動画や映画・ドラマまで倍速視聴している学生にも読み進めやすいページ構成となっています。コラムには、ほかの領域との関連が浮かび上がり、解剖生理学への興味が深まるトリビアが満載です。

さらに、今回新たに「解剖生理学が臨床につながる！」ページを各章末に加えました。解剖生理学の知識が臨床でどのように役立つのかを理解でき、また、病気だけでなく、食べる、動くといった生活動作の視点でとらえ、看護実践に生かせる内容となっています。このような大幅改訂を行ったのは、膨大な領域をカバーすることが求められる看護教育課程の中で、少しでも楽しく専門領域を学んでほしい、看護師という専門職になる勉強が始まったのだと、学生に感じてほしいと考えたからです。

私は医師の立場で、今回の編集に参加しました。依頼を受ける前の年に家族の入院を経験したのですが、改めて病棟で勤務する看護師の皆様の守備範囲の広さに圧倒されました。患者や家族が不安にならないような言葉掛けから、食事、入浴、排泄補助や清拭といった生活面のケア、身体状況の確認と評価、患者の訴えへの対応、配薬や検査・処置の実施など、その業務は多岐にわたります。勤務する部署が異なれば、さらに異なる領域で専門的な役割が求められるでしょう。それに対応する知識と技術の基礎を3～4年間で学ぶというのは、相当に大変なことだと想像します。せめて楽しく、効率良く学んでもらいたいという思いが、今回の改訂版の制作につながりました。

執筆者は、臨床経験が豊富で、教育に熱心に取り組んでいる看護教員ならびに、看護師とのコラボレーションの重要性を痛感し、看護教育を応援したいと考えている医師たちです。コンテンツとデリバリーの両方を意識して制作した本書を、ぜひご活用ください。

編者を代表して

順天堂大学大学院医学研究科医学教育学教授

武田裕子

名は体を表すといえます。「解剖学」と「生理学」とに区別して各々を独立させる考えと、「解剖生理学」と一体化する考えは、根本的に異なります。

医師である私は、前者の考えに基づく教育を受けました。その際感じた疑問点は、医学部卒業直後から関わるようになった看護学生への教育の場で、より深刻な問題となりました。卒業後すぐに従事した臨床の現場で役立つ知識は、解剖学と生理学を統合したものでした。しかしどのように統合し教えればよいかはわからなかったのです。この答えを知ったのは、卒業後8年目の1980（昭和55）年に筑波大学医学専門学群（現在：医学群医学類）で教育に従事してからでした。

筑波大学医療技術短期大学部看護学科（現在：医学群看護学類）では、泌尿器科疾患についても講義を担当しました。臨床に役立つ知識の統合という視点に立って当時の看護学生用解剖生理学の教科書を見ると、^{かっかそうよう}隔靴搔痒のもどかしさを覚えました。

その後1995（平成7）年に開設された山梨県立看護短期大学（現在：山梨県立大学看護学部）で、専任教員として専門基礎といわれる解剖生理学や病態生理学を担当することになりました。カリキュラムを検討する過程で、入手可能な看護学生用の教科書にはすべて目を通しました。以前感じたもどかしさは少し解消されましたが、満足するには至りませんでした。

理由は明白でした。看護職にある方が書かず、基礎医学専攻者が書いているものが圧倒的に多かったからです。看護師と医師では、仕事の内容が異なります。内容が異なれば、同じ知識でも必要な度合いは異なるはずで、看護学生の解剖生理学の教科書が、医学生用教科書を簡略化したものでよいはずはありません。看護師に必要なことは、看護師でないとわかりにくいかもしれません。それではなぜ看護職にある人が解剖生理学の教科書を書かないのか。その理由を考えるようになりました。

専任教員になった後、アメリカで看護師の資格をもち看護学生に解剖生理学を教えている人の書いた教科書に出会いました。そのときの印象が強烈だったことは今も覚えています。心電図なしで循環器系の説明をするといった大胆な企画にも目を見張りました。もう一つ印象に残ったのは、鮮明な多色刷りの図版でした。サイエンティフィックイラストレーターという職種があるのは知っていましたが、こんなにわかりやすく図示できるとは思ってもみなかったのです。解剖生理学の教科書にはカラーの図版が欠かせないと思い知らされました。

以上のような経過を経て、私は看護学生用の解剖生理学の教科書の条件を考えるようになりました。

①執筆者はできれば看護師の資格をもち、臨床経験のある方がよい。そのような方がいない場合は、臨床医としての経験が豊かで医学生だけでなく、看護学生も教えている医師でもよい。目的はもちろん臨床に必要な知識に重点を置いた記述をしていただくためです。

②図版はわかりやすく、秀逸なものがよい。どんなに記述が正確で緻密であっても、百聞は一見に如かずです。言葉での説明には限界があります。看護学生の場合、医学生が行う人体解剖実習を見学する機会さえもたない場合が多い現状を考えると、図版の重要性はどんなに強調してもしすぎることはないと思います。講義中にスライドを使って見てもらうとわかるのではないかという意見もあります。しかし一瞬見ただけでは、記憶に残りません。図版を見ながら考えることもできません。

このような考えを抱くようになったころ、たまたま当時のメディカ出版社長の長谷川良人氏と話をする機会がありました。看護学生が活用できる教科書を作りたいという点で意見が一致し、具体化したのが本書です。

執筆者はできるだけ看護師の資格をもち、臨床経験を経た上で研究や教育に従事しておられる方を選びました。ページ数の制約がある中で、どのような項目をどの程度まで詳しく記述するか、各執筆者の苦心の跡がうかがわれると思います。それゆえできれば外部からの講師に委託するのではなく、専任教員の手で解剖生理学も講義していただきたいと希望しています。

図版は当初の意気込みがなかなか実現せず、編集の方々の手を煩わせることが重なりましたが、従来の日本の教科書にはなかった“視覚に訴えるもの”になったと自負しています。

医学的知識や医療技術は日進月歩で変化していきます。本書が現在には対応できても、将来も役立つかどうかはわかりません。時代に即応する教科書として、改訂を続けたいものです。本書を使用された方々からのご意見、ご感想をいただけたら幸甚です。

山梨県立大学名誉教授、元 京都橘大学健康科学部教授

林正健二